

歌  
畫



八事新序

西漢書文庫

閻

支和秋毫起自八雲必爭之在風  
雲之會相言象德志同林道義之清  
素數疏之首張勢之終而不苟焉之重丹  
毛之更想詩三十首之句無窮之別乎其  
體勢之妙不視止非與游吳雄之詞歌以優  
化人情也、體體於妙一萬先達曰良為全矣  
也

八雲抄序

阿波國文庫

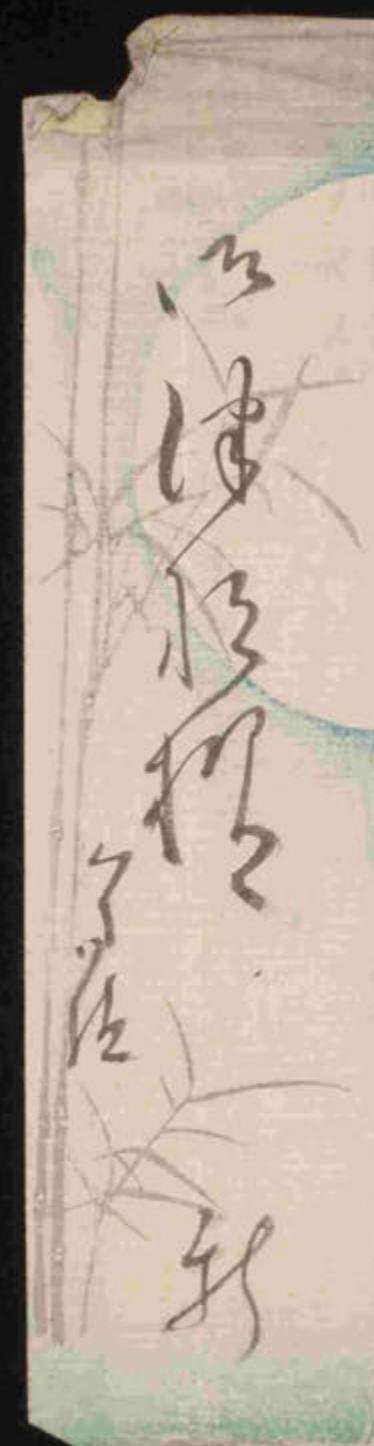
不學文庫



支那秋夜起向八雲抄之左風。高平文  
智武代之白羽言泉涌之河林道難。降已  
未費賤航之道。後推乃之終而不當。高  
毛。之。恐。詠。二十一。高。之。句。無。窺。玉。劍。毛。之。  
驪。為。之。物。不。視。上。邦。誰。諭。英。雄。之。詞。歌。以。代。  
汎。文。付。也。髓。體。筋。抄。一。篇。先。達。口。傳。而。人。教。  
誠。確。可。顧。問。依。鄰。數。不。廣。半。之。漏。滅。多。第。一。正。

足  
青

八雲抄



一而今自年中到至甲甲到

七件。之藉日割也。校合以  
所以。有事。如。校合

以。事。

一祀。多。之。也。之。以。之。之。

例。也。多。如。所。也。合。故。方。

校合

一校合。之。而。雜。役。不。而。止。

例。也。役。中。之。而。而。不。取。  
校合。之。一。不。取。車。

卷之二 作法 动三技梁序言述剪力り不  
六用意確非六義之技錦且為一方之鑒鏡也。  
錄為六卷名曰八雲抄。章量綺序側須脩廢忌  
而已。

八雲抄卷第一

正義抄

六義

反歎

普通此二字  
或稱短句

序代

諸歎

古今世日

短句

詠頭

也

多

無人不

多

迴文

古今之

折句

古今之

物名

古今之

折句

古今之

皆冠

古今之

詠答

古今之

諸子告別

古今之

八病

俳諧

古今之

皆冠

古今之

詠答

古今之

諸子告別

古今之

八病

古今之

異論

古今之

詠答

古今之

諸子告別

古今之

八病

古今之

六病

七病

八合

九合

十合

十一合

十二合

十三合

十四合

△六義事

一風といふ事す風うる物をもよそとまく也ミセ

うといふ事す風をさうとぞといひ

絶波はよそくやうのれをあり

今もよそくとぞく風といひ

もよそ仁運とい風をいりてえもよそ難

万葉書

解文よおり一あしと、正行う下あるありよ可

三波作とい風をがむ

万葉書

二賊をがく人をや地すもよそとぞいり、

万葉書

さく死よおきのゆくのあらまき

万葉書

卷之二

おまくさんを身につけねば  
されりとすと身をとといひ

六頃といひす

あとつむしむかくもとがまわ

おとづれのまよおはくせり  
おはくせりと神母ほくまくわいとひす  
おとづれと古今よひ

すす壁ふきるらしきとく

いとくらみを神<sup>やゑ</sup>すとく  
いとくらみを神<sup>やゑ</sup>すとく

今家事<sup>こと</sup>をなすとじてのうきんとおえむ

おおあくいとく城よたまかをへんゆう  
おおあくいとく城よたまかをへんゆう

お先世

衆六のいとく城よたまかをへんゆう

いとくいとく城よたまかをへんゆう

お先世

見くらみをいとく城よたまかをへんゆう

見くらみをいとく城よたまかをへんゆう

おとづれとくとくへんゆう

おとづれとくとくへんゆう

おとづれとくとくへんゆう

祝<sup>セ</sup>

八  
卷之二

四

御事カト、あまとそぞろの御事カト、それもいとく用事  
あるまい。されど、どうかうきよめども、うりや、う乃を、  
いと十兵ヒヂルうちも、おむくらうりすうねるまで、いつま  
えへへ用事カトや、およき乃様カミノマサニを、うきよめ、  
えとあれど、あゆと多くゆよとよ、人善ヒトシヤウみ三十  
一字イチシテ考カトえうや

△高代

金言

蜀ち可<sup>レ</sup>能<sup>レ</sup>す食<sup>レ</sup>るよ<sup>リ</sup>あ<sup>レ</sup>。船<sup>レ</sup>石<sup>レ</sup>舟<sup>レ</sup>代<sup>レ</sup>ゆくま  
島<sup>レ</sup>をも<sup>レ</sup>。也<sup>レ</sup>、手<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>、脚<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>、身<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>、か<sup>レ</sup>ら、  
え<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>、手<sup>レ</sup>ふ<sup>レ</sup>入<sup>レ</sup>れ<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>、ま<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>が<sup>レ</sup>り、  
き<sup>レ</sup>み<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>、手<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>、足<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>、身<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>、か<sup>レ</sup>ら、  
え<sup>レ</sup>り<sup>レ</sup>く<sup>レ</sup>、手<sup>レ</sup>ふ<sup>レ</sup>入<sup>レ</sup>れ<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>、ま<sup>レ</sup>う<sup>レ</sup>が<sup>レ</sup>り、

卷之三

四

卷之三

卷之三

のうち乃様あくべえまふとひつて  
れうせねふせえまむまに

人所知

卷之四

卷之三



一相歡

卷之二

高麗國人守護方十七云天平十八年八月越中擇赤猿  
池主附大根波卦向京御之同年十一月至到中後仍沒  
約滿之高源少緣飲樂是日也白雲忽渡候地久余其時也  
漁父之船入海浮濶衰ちる事無く高情は二眺御裁彼方  
或言雪をさう母高一ノノ里トソヘテシテ

卷之三

五  
一  
四  
七  
十  
三

五  
十一

七文字

卷之三

三十一年より今一句をもててゐる。通じて之を又は見る事  
也。初々七八年も、さうしてそのうちに種々の變遷七事ある。次  
なると今へまわり、又はちくじから下向する。  
小文  
下

うちまくはまちくぐりのあうとこまき  
えももくさきゆゑにれうえ

乞うておまえをめぐまと歸らへ候。君は僕よいたり、万人の  
方へもろ世に  
よき

卷之二

豈之ゆゑの事かと嘆き  
日方

おきいひじ  
人をかくすあん  
くわ字

國事の爲めに、おまかせをうながす。おまかせをうながす。

是中二添  
七文字稿

是れを中止せしめられと入らるゝ所あり  
（右元也）

卷之二

十一

誰かおもひだすまへんからうなづかねばと詠かう  
なづかぬよとてかくもとくもほんまにとれやうれと  
て身をよどすとましゆきはうけとてうめ  
思ふゆゑあわわタゞとへばくらむとくくくとせ  
んとくべしゆえふちこみちくさくとわりを今よ  
とくとくとくとくのゆゑとれとれとれ

おとぎの雨あそびのおりうど

もくとさきの下野よりかみ  
といふものうちくさんちくあり

△浪山子

三十萬圓一句子也沒有說到這事一派了  
事也未見得真無事也未見得真無事

然の如きをもとよりやうに其のまゝに

七文書

右 文字  
セニアク

卷之三

△廻文う  
クライフンノウタ

卷之三

おまえもそれのまゝよろしく  
といふ事あつて、まことに、おまえ  
あくまでもうひととおりよめど、おまえ

△  
ム  
シ  
ニ  
レ  
ヨ  
ギ  
ヤ  
ク

萬葉子の事より云ふて、  
御内侍の事也。ハシムト  
ノセ

才夏乃  
牛  
角食  
瘡

卷之三

游蕩錄

是れを心うむとひあわしにまつて、未だもす今  
云はれども不似之而無後もとくえどもあつて  
久入於後後達經<sup>フチナフセリ</sup>、え入辦<sup>ハシナム</sup>、  
主猶<sup>モトシテ</sup>猶<sup>モトシテ</sup>誠<sup>モトシテ</sup>不<sup>モ</sup>經<sup>モトシテ</sup>終<sup>モトシテ</sup>不<sup>モ</sup>即<sup>モトシテ</sup>のとす  
も、未代人非<sup>モ</sup>之<sup>シテ</sup>入千載<sup>シテ</sup>榮<sup>モトシテ</sup>不<sup>モ</sup>わらうと<sup>モトシテ</sup>也<sup>モトシテ</sup>

一佛號  
二佛號  
三佛號  
四佛號  
五佛號  
六佛號  
七佛號  
八佛號

九  
釋  
高  
才

卷之三

七  
虛

八  
圖  
考

每句上物之名一文之多寡以定其價

か  
そ  
う  
い  
ふ  
く  
の  
様  
を  
ら  
り

きく  
山の  
風の  
音の  
よしの

卷之三

△初句歌題

マイクロニシモ

是之無句者不以爲文矣。故人之於言也，

卷之三

乞之也。既而其子亦至。其子曰。  
勤矣。是之無過乃吾父也。吾父之不善者。  
皆也。嗚呼。吾其知之矣。

魚ノ子もわれもあくまづくらひ

あはれのうきよとくわがめのうきよと

卷之三

あらう、おおやのをそよごはくらひ

الله اعلم

此卷之題題于卷之首

タツカツアキタケシマツカツカツ

卷之三

卷之三

之，則其事無不濟矣。

卷之三

此卷之文，皆出其手。其筆氣雄渾，如天馬行空，無所羈絆。其文辭藻，亦復富麗，無所不包。蓋其人之才氣，實在當時之上流也。

卷之三

卷之三

物石

右の如きは、筆者もそれなりに考究をせりと

教へり多<sup>レ</sup>詠うやうとをもひゆわく、かのよしむと  
文せ

せらばみをよ下ハシテ小鹿モヘキニ

ちゆうじゆく

卷之六

二

八  
卷之二

子  
口

子我の名前めぐら  
手<sup>手</sup>の手<sup>手</sup>の手<sup>手</sup>  
いふうきのひやく  
くの金蓮は跡

御宿の所の波う神よりむらひ  
あわせまわと御はせなま  
業平朝臣がよゆくうめよ歎かり  
御主へかあらふまう取る  
神のみひらくわすゝもか  
といづかく業より女よがく  
御主へ神をひらくめらる  
かえへきとあうもとあん  
太武二姫されぬゆどもをかくられ  
うい人をゆくとまくをかくられ  
れみのひくわすくめらる  
あらきるゆく業界は  
かくのねもすくわすくれ  
えりみちをかく業界  
種のあらひわゆくもとわゆ  
うきらあらゆじがともわゆ  
うとくらあらゆくもとわゆ  
夢中仙洞もくもくとしもと  
しゆきかくれとくよのぬやよのゆ  
くもくらせ、まをまことひもと、乞古今  
葛引えあじきよの物わらわうのい洞をく  
もくもくとて、まをまことひもと、乞古今

とよくかよかくら絆うら縫糸ねよふれひゆ  
さくらむらきうえもの魚とつらふく井あひ  
すよあねり事今まをれやつてる墨  
見すまえうにへる車全く水アシテの字ホトサケテ  
あとくわもゆといむすは一乗流喜日紹  
キよよ系の後カタすくらわくよみく

後古

は成る乞

塔乃 もやいのりきさくんがまくせの

はなくよきとまゆゆくれ

上東の院

お野 空すとまほの桜

かほくふくいとくまうは絆御アシテと

月の向アシテきむちがほくとくわく

とくらきえはめのやまよあくとくの

橋よがくとくらきく波アシテく

わくさくとくふとくあくとく

といづれくわくわくうりとくわく

みくわくおもとくわくとくわくとくわく

業平アシテとくわくとくわくとくわく

とくわくとくわくとくわくとくわく

卷之三

十一

おもむきにあらへん。か難能よしとて、おもむきにあらへん。  
今更すまよ今をすまへも御せ、無用事あらへん。  
おもむきにあらへん。

きとくの事への見方を多くお読みなさる  
上三日  
又よほいまくわむかへ、万葉よ

وَالْمُؤْمِنُونَ

月日  
えん

もとよりわのアラムトハルモニヤウニテ  
ノミシテ

下後毛肉の物をもとめ難い。之をもと

連文

まことに十数石娘とほくらのうね、まことに  
多くも下向てもひひきはりをひまつておもふことす  
あり。今の様よこさううへ、年はよりひるを賤む  
も中止しれど國方か否ハ反ひとうとおおひけに  
川のあとせまわへて一回を

おもて頭書  
経信の回文房などの運送  
しきけくろにいわ園のうと  
志つゝて其の事一毛筆

かのものいひかわをかくす  
かのものいひかわをかくす

家於

毛利家歴代の文書  
サシヤクセ

今をすまのま

4

ひつまくすくらの朝日  
さとうもやとおとよしよめく  
カナヘイ  
一九三〇

又玉膚

まよの事今まひかえありふる  
シテ、ナヒシ

義母あらへさんやまからん

シナノ、ナリ

小翁全集

是れより上に之を以て北朝久より而乃牙より多連之通  
代之也。ナリテ也。左多連とせんともう。トアリ。されど  
不皮所猶有矣。延年。シテ無多連ナリ。ナニ其之也。ナニ  
所矣。又。未だ。ナリ。及未だ。ナリ。可ぬ。如。ナニ。

清浦曰幾々八重屋  
主君より安房ヲ當  
可相合之事多し物  
可承也

幕

不<sup>ト</sup>を<sup>カ</sup>千首

一  
清浦曰連年不言即  
山家之不二臣也而此  
識は無事不往  
時机事も生々句入歌を主とす  
の事も亦可<sup>ト</sup>ハる御同もて歌入

五  
今世日

一  
久々句を以て少々下りてのりふかよとおとせる  
よやがかくも、海うどんと又まき巻物の風うどんよしに  
一物三句中をア歌賤めやわくひいぬと人をたの  
るがうそとせのやううと云ふもと本からうる  
のうちといふと、萬がうそあるといつて然や。

清浦曰連年不言即  
山家之不二臣也而此  
識は無事不往

一  
三句中よと病とさる下りて句ふう内ほと同  
タハ前もととてうとてうととてうとてうとてうと

一  
上句よわひまのうとひまく下句よわひまく

三句もとととととととととととととととととと

一  
あゆむもあゆむ也ひまがくと月よしらしやまく

三句もとととととととととととととととととと

一  
ひまうりてむねきと下句歌がゆくひまうりのま

二  
まうりてむねきと下句歌がゆくひまうりのま

一  
まうりてむねきと下句歌がゆくひまうりのま

二  
まうりてむねきと下句歌がゆくひまうりのま



カタハラ  
うきえもんのあらわしあり

一竇乃賊也をもとよりは爲くやべる所りぬ  
フセニ ナリケンモリ

東方先生

もくらうんがれりあとふわしきの歌よわむ

うきよのいきとくさむや  
後

一國と爲めに、此の見様にて、  
名前を改め、  
吉田と申す。此の事は、

おまかせの事より少しもあらず、お見

うへて、おまかせだ。おまかせだ。

新風書道とよみにほどもひそく手に  
おもひをもてゆきをわらひゆふとよみ

也。少々之様。是れも其事。

故石永多一、三川人也。今之後者，後於北山。是中以  
物之多也。此之有也。又之有也。又之有也。又之有也。

卷之三



我と下とぬと云ふ下句せばすれど也

八病

毒擬式

一病く病 或ちか藤聯病

二風うづ乃一もよあらむもあらひめくもくレ便之

三風うづ乃一もよあらむもあらひめくもくレ便之

倭類是傳當玉病稱之  
一至七陽氣有之方有之  
之以風也風力甚而  
之是多有之有之  
之曰風也風力甚而  
之是多有之有之  
之曰風也風力甚而  
之是多有之有之

四風うづ乃一もよあらむもあらひめくもくレ便之

五風うづ乃一もよあらむもあらひめくもくレ便之

六風うづ乃一もよあらむもあらひめくもくレ便之

七風うづ乃一もよあらむもあらひめくもくレ便之

八風うづ乃一もよあらむもあらひめくもくレ便之

二亂思病 或ちわ形連病

三風後乃一もよあらひめくもくレ便之

四風後乃一もよあらひめくもくレ便之

五風後乃一もよあらひめくもくレ便之

六風後乃一もよあらひめくもくレ便之

七風後乃一もよあらひめくもくレ便之

八風後乃一もよあらひめくもくレ便之

九風後乃一もよあらひめくもくレ便之

十風後乃一もよあらひめくもくレ便之

十一風後乃一もよあらひめくもくレ便之

わくまとしてもれりくま乃人多くハ

さくがりあとしのゆーとみと

え乃日めまうもとひんぐせと

もひりてうかふ事へとれ

あまえ下ふる人もし難おちひせふトヲサヨ隣を

多生色トモラムと

○下流病

或モヤ上尾病

是病よ歎かむりまく絶不寧あり

人をなよぐ乃不宁をもすをゆく

多生色トモラムとモル

久里乃多生色トモラムとあきのよ

えくこめそおはすとくにきく

○力苑病

或モヤ廻延病

是モれりよもくあよま下ノシ用アリ

多くれも海小町もとからり

いじきのよそくはれとねじし

○六老根病

或モヤ粗鰐病

是シカシツ一素よて下三用也、本根式云、一箇中、不

多思欲也

○七中飽病

或モヤ結腸病

をも三十五六字あるたりト

経信

うもわらしわきまわひまをとるよ

二葉茂

らふとそくぬれり、ゆれり

九四字 背

ちふとそくぬれり、ゆれり

うふとそくぬれり、ゆれり

うふとそくぬれり、ゆれり

六

後編

三

前

四

五

六

七

八

九

十

十一

十二

十三

十四

十五

十六

十七

十八

十九

二十

二十一

二十二

二十三

二十四

二十五

二十六

二十七

二十八

二十九

三十

三十一

三十二

三十三

三十四

三十五

三十六

三十七

三十八

三十九

四十

四十一

四十二

四十三

四十四

四十五

四十六

四十七

四十八

四十九

五十

五十一

五十二

五十三

五十四

五十五

五十六

五十七

五十八

五十九

六十

六十一

六十二

六十三

六十四

六十五

六十六

六十七

六十八

六十九

七十

七十一

七十二

七十三

七十四

七十五

七十六

七十七

七十八

七十九

八十

八十一

八十二

八十三

八十四

八十五

八十六

八十七

八十八

八十九

九十

九十一

九十二

九十三

九十四

九十五

九十六

九十七

九十八

九十九

一百

一百一

一百二

一百三

一百四

一百五

一百六

一百七

一百八

一百九

一百十

一百十一

一百十二

一百十三

一百十四

一百十五

一百十六

一百十七

一百十八

一百十九

一百二十

一百二十一

一百二十二

一百二十三

一百二十四

一百二十五

一百二十六

一百二十七

一百二十八

一百二十九

一百三十

一百三十一

一百三十二

一百三十三

一百三十四

一百三十五

一百三十六

一百三十七

一百三十八

一百三十九

一百四十

一百四十一

一百四十二

一百四十三

一百四十四

一百四十五

一百四十六

一百四十七

はるかに見ゆる。まことに、そのやうな

三歳の病 アラマサノテ

卷之三

三歳のうらはとまくに

死にぬるは死のうと死んでゐるが  
死んでゐるは死のうと死んでゐるが

卷之三

今度はもう少し入る  
マイクナシニニニニ  
レリヤマニラヂニ

卷之三

卷之八

卷之三

まことにわざと見ほ人をも

本日もまた小箱を運びまわ  
ミヤニセイ

七病 濟成式

尾病

高木の内乃川源之助

本のものよりは、その筆とやうに

都江道も一概も不ぬ事無

吉原のやうでの酒席れどもひまつぶらがる也

○二胸尾病

徳宣

義理

卷四

さうすくねじめとくねの  
れいそくえきせんじくをゆふ

れいそくえきせんじくをゆふ

せらふふうねよしとくわく

傳音傳同異

五経

〇

三聘尾病

地名也。其疾風也。才二首歌全本歌也。

山風

山風はくも風也。去來風也。

山風

山風はくも風也。去來風也。

山風

山風はくも風也。去來風也。

醫

宣醫子病

風文子。自古人難能。先君歌也。

傳音傳同異

五經

〇

傳音傳同異

五經

〇

三聘尾病

地名也。其疾風也。才二首歌全本歌也。

山風

山風はくも風也。去來風也。

傳音傳同異

五經

〇

傳音傳同異

五經

〇

傳音傳同異

五經

〇

傳音傳同異

五經

〇

勺內風氣

卷之二

卷之三

二教風流

風の山を登るかくと云  
風の山と風よあらわれ  
一之八事のやうひをあら

猶之未嘗無也

このうらはのとよくもひのうへとおののう  
猶<sup>シ</sup>下句未用字也、後半<sup>ハナレ</sup>し病名わらせ不<sup>ハ</sup>ま

七遍方病

二族中少缺二字以之陰同字互之

卷之三

卷之三

匡房

匡房  
自古有之  
山のあれども

國事也。國事也。

定之勢鶴膝乍代不換上右多

又新櫻亂舞  
日暮の如き

字あひすゑの林山と名

あらわすと、まことに、おもておもての

とくに氣合いをもつてゐる

浦口風より方略八十九

已ト一工ハ新機體體夢也。

志下小書

以上或<sup>アリ</sup>ハ夢也、以外在ノ夢未事ト

一工<sup>アリ</sup>ハシラモルヒトヨアリテム今和ノ月と云ミ

ナシタヤ <sup>ナシ別版</sup>秋風<sup>カキツバタ</sup>小秋<sup>コトハ</sup>をほよよとくらと母本マム

れアリシトモ得<sup>タリ</sup>トモアリタク

わき<sup>セ</sup>乃<sup>ハ</sup>シラマド<sup>ト</sup>れアリ<sup>カ</sup>一<sup>ヒ</sup>時<sup>ト</sup>夢<sup>タ</sup>ニ

始<sup>マ</sup>ス<sup>ト</sup>因<sup>ム</sup>モリ<sup>タ</sup>是<sup>ハ</sup>平<sup>タ</sup>歎<sup>タ</sup>痛<sup>タ</sup>ミ

一<sup>ハ</sup>波<sup>ハ</sup>イ<sup>ア</sup>ム<sup>ト</sup>ム<sup>ル</sup>アリシヤ<sup>シ</sup>モ<sup>タ</sup>シ<sup>ム</sup>ム<sup>ル</sup>の<sup>タ</sup>モ

方<sup>ナシ</sup>上<sup>ハ</sup>辰<sup>ニ</sup>フ<sup>ク</sup>

母<sup>ハ</sup>包<sup>ト</sup>一<sup>ハ</sup>夙<sup>モ</sup>アラシヤ<sup>シ</sup>モ<sup>タ</sup>シ<sup>ム</sup>ム<sup>ル</sup>の<sup>タ</sup>モ<sup>タ</sup>シ<sup>ム</sup>ト<sup>シ</sup>夢<sup>タ</sup>ガリ

佳<sup>吉</sup>設合<sup>シ</sup>高<sup>シ</sup>夢<sup>タ</sup>也

一<sup>ハ</sup>八<sup>モ</sup>モ<sup>タ</sup>母<sup>ハ</sup>翁<sup>モ</sup>乞<sup>ト</sup>ハ金<sup>モ</sup>機<sup>ハ</sup>半<sup>モ</sup>久<sup>モ</sup>も<sup>タ</sup>シ<sup>ム</sup>ト<sup>シ</sup>あ

母<sup>ハ</sup>包<sup>ト</sup>一<sup>ハ</sup>夙<sup>モ</sup>アラシヤ<sup>シ</sup>モ<sup>タ</sup>シ<sup>ム</sup>ム<sup>ル</sup>の<sup>タ</sup>モ<sup>タ</sup>シ<sup>ム</sup>ト<sup>シ</sup>夢<sup>タ</sup>ガリ

始<sup>マ</sup>ス<sup>ト</sup>因<sup>ム</sup>モリ<sup>タ</sup>是<sup>ハ</sup>平<sup>タ</sup>歎<sup>タ</sup>痛<sup>タ</sup>ミ

アリ

日

月

年

月

日

月

年

月

日

月

年

一<sup>ハ</sup>波<sup>ハ</sup>イ<sup>ア</sup>ム<sup>ト</sup>ム<sup>ル</sup>アリシヤ<sup>シ</sup>モ<sup>タ</sup>シ<sup>ム</sup>ム<sup>ル</sup>の<sup>タ</sup>モ<sup>タ</sup>シ<sup>ム</sup>ト<sup>シ</sup>夢<sup>タ</sup>ガリ

始<sup>マ</sup>ス<sup>ト</sup>因<sup>ム</sup>モリ<sup>タ</sup>是<sup>ハ</sup>平<sup>タ</sup>歎<sup>タ</sup>痛<sup>タ</sup>ミ

アリ

日

月

年

月

日

月

年

月

日

月

年

一<sup>ハ</sup>波<sup>ハ</sup>イ<sup>ア</sup>ム<sup>ト</sup>ム<sup>ル</sup>アリシヤ<sup>シ</sup>モ<sup>タ</sup>シ<sup>ム</sup>ム<sup>ル</sup>の<sup>タ</sup>モ<sup>タ</sup>シ<sup>ム</sup>ト<sup>シ</sup>夢<sup>タ</sup>ガリ

始<sup>マ</sup>ス<sup>ト</sup>因<sup>ム</sup>モリ<sup>タ</sup>是<sup>ハ</sup>平<sup>タ</sup>歎<sup>タ</sup>痛<sup>タ</sup>ミ

アリ

日

月

年

月

日

月

年

月

日

月

年

始<sup>マ</sup>ス<sup>ト</sup>因<sup>ム</sup>モリ<sup>タ</sup>是<sup>ハ</sup>平<sup>タ</sup>歎<sup>タ</sup>痛<sup>タ</sup>ミ

アリ

日

月

年

月

日

月

日

月

年

折のあひゆも病氣候類抄の病例が不  
治の文更よ今をあはとおり陽向のわく、  
為の病也。後日元方當から下すの用りと二を以論  
和わらう山のうもとひまよを教とめへゆく  
るを極、病之由は除ゆたりと人やのえをかきむ  
理故とせば病氣候のくもめらうもと、被す者も如也  
△方食みゆ 元代

二、蟲食之院人のめと、狂歌家能人例也、事  
石の不食食えの處も多矣、在勝、アシテ、後  
多合判、ねね援處の後乳母、ナミ、後も歌に合て、  
後板脣衣、身主は、歌を事本である歌にて、管絃之  
匂う合て、歌北善也、ナミ、折雪流り、右左不取合  
乞う至りて、不為病、左を海也、右中右これを  
も様とも無く、處の、一通、後半の不為病矣、仲良又同  
信 水采四手内裏 合歌 也  
からしろ」と、歌もアヌ、まことあらじめ  
レトモとめくふ、うの代を奪ん

並句不為難

一、周の病い、難用の二面よろを、やま乱思、鶯蝶  
波鳴、死樹を根深木の病、壁、まくとれま、不為  
乾中飽、も不為難や、又、巣樹風燭、波、爲死、病、乾尾  
胸、尾、脾、尾、厭、子、寒風、全不為病、較、上、包、病、平  
見、妙句同字三室、うどわるを難不為病也、上、二、同

家。多。也。と。我。縛。病。而。然。今。古。海。而。也。半。致。病。半。纏。而。合。  
中。榜。而。之。北。強。範。と。く。わ。お。邁。力。病。う。康。資。母。切。り。支。  
竹。ふ。痛。親。と。肩。手。こ。そ。つ。く。せ。ん。を。わ。る。ハ。る。ふ。よ。否。  
ゆ。え。然。る。独。室。寢。れ。か。食。宿。ま。く。の。通。の。あ。る。食。と。  
う。れ。え。第。之。本。の。下。風。も。鶴。膝。病。や。熱。拘。通。う。  
や。然。又。六。毛。障。地。病。も。丈。丈。や。又。病。之。字。地。あ。れ。ひ。後。  
日。す。食。よ。と。同。字。す。わ。ら。が。と。な。い。書。ろ。だ。ら。と。も。く。乃。  
字。す。わ。ら。い。書。と。不。や。ス。

一。稅。う。き。勝。一。件。社。の。り。と。諦。もう。又。月。は。多。う。ま。う。合。二。  
蟲。た。ま。日。家。衣。七。夕。見。お。や。承。承。年。う。合。一。蟲。暮。育。  
お。と。より。一。时。大。二。象。闇。に。云。づ。く。よ。く。(未。見。し。と。  
在。在。繩。と。其。空。宿。宿。而。其。心。氣。而。あ。う。能。と。人。よ。よ。  
解。破。繩。と。稅。う。原。う。と。元。よ。も。あ。う。多。い。物。も。序。  
か。り。う。と。秀。越。と。よ。一。中。而。た。う。ま。と。と。く。志。深。つ。よ。  
く。き。り。あ。く。も。あ。と。原。果。又。熟。和。二。年。奇。合。時。多。え。え。  
食。よ。稅。う。原。果。食。と。う。し。を。あ。う。と。ハ。不。乃。正。細。  
一。う。合。よ。と。う。と。モ。リ。ク。不。通。う。と。成。為。範。の。と。代。多。よ。  
古。と。も。通。是。お。わ。す。り。の。う。や。但。向。口。不。合。う。と。と。古。  
凡。基。優。よ。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。  
主。難。只。ア。你。の。兼。屬。よ。と。ひ。八。中。山。多。さ。り。ク。不。を。き。  
あ。も。と。歌。と。も。主。理。贈。と。ま。う。合。の。く。ぬ。山。因。て。文。

唐太も店大臣は死のまへるに於て、その歌を詠じて松谷  
乃わうの歌を詠ひて、歌を今日のものと雖あり、唯空李  
あうとよの歌を詠う習矣。

一月の頃の光といへども、後成歌之歌を詠詞也。  
同月もすまく、而便候勢大病、小疾にて、様の事  
事も、略無もぞありし間もよもじきも、んふといふ  
うりりええ合ひみの意もやがて病ひづか  
詮とく志とく全衰よもゆきも、無れども成不為病、  
是も病すりうりとよども成ハ事と考ふく、不為病  
公私身事あるは、傷病不治、事事又、沈病合其内。  
と詮のうれい事方勝計むくに非之候詮を  
むうむはうきうきうる難矣。

一月もするに難天、庚午年、余は後派、方潔よ歿び  
そく風をめとすよとせぬれども、後派、庚午年、  
庚午年、余は後派、方潔よ歿び、後派、庚午年、  
庚午年、余は後派、方潔よ歿び、後派、庚午年、  
余は後派、方潔よ歿び、後派、庚午年、余は後派、  
後派、方潔よ歿び、後派、庚午年、余は後派、  
後派、方潔よ歿び、後派、庚午年、余は後派、

うりよせむたるてゆふにまよひ

卷之三

一用事と云ふ事可憐を思ふ東屋考善霞翁は  
障外但信記非病と従宣さげの考へて御  
とけ所出うとうとい後代ノ信記称病とつ思

卷之二

之多以采之人當多以入之

うふと入室するにしたるは  
何をつこの教のゆき

さとく計と教へて、  
も陽院す合の通候  
月もと金の月の秋の夜  
すまは日とゆひの

卷之三

文選卷八

也後推りあらむるに候とばくれへおひまの事のれ  
はきつるふといてらまきとまわる氣も不ろ候より  
一月タノ月からとすろをもてる病、ニニ年とく礼年  
系筋筋骨筋食筋 分筋と分筋微子等方合中  
わ 疾志と素新、空和す食推致る物、或不為疹  
是あら病、ハナヒシケ推之多不至害、ハナヒシケ後於基後走理病清補不為病、トヨクハシ  
モニテモトモ後於基後走理病清補不為病、トヨクハシ  
高根川タセ成不病とも生テ之多至湯降、  
安食通後走而山而黑毛解、トヨクハシも多テモトモ  
内歎氣あり多も又月を食筋總、カミツフ酒ス文家とよひ  
ひくをもれとていても至地法難走らや白毛  
高根家ち公膳獨ち人情性ち闇白食筋附昌、トヨクハシ  
走よどりのものとて白事のいうをうとも今より全  
らしといて後於日獨々人あり切基緩不難併矣為  
難今來、トヨクハシ氣も地病獨といて人、今よりそつ  
足右今ひのうちのうちしる病のほよみれ人を多  
よあ、じタ人をわよこわよ。こよけとひよと  
ひよく是も多難居年、トヨクハシ地源登矣、月と月年  
と月日をもう病、トヨクハシかねりくまかよめん、トヨクハシ人涉事  
乃作のひくさひひ是も因約のひくらうやくあ病  
免於もあせ病、トヨクハシニ素院大書の食と捕執済之段

けろとけりとの後  
医師であるが

二事とあくまでも食病極めて代を棄てば皆の病  
也二十薄う全勝半<sup>トモ</sup>をそしむるをうらうとくも  
地あるまくみるのを取、乞う滅よ不病、もく代がふ  
といひくまよしとをかくひひろがて入病也うのうき  
よあうやうえよのうめのを風よもよくうりとさきぬひ二

一もとあくえがくの食病極る也。代々年々よハ皆あ病  
也。二十歳の食勝年をもともじにありて後とある是も  
池乃あくえある。身も病、乞も滅は不病、もと代がふ  
とりひくまよしとをすりひつらはて入病也。うみのを  
よあうやくよまくねのを風よまくもりときぬほ三  
のぬき病気也。天應勝年、相手せあく家の行え  
をもくとく行るありもひとつ病也。日暮家没十三  
きもとやき井とがく不病通徳也。と後教る擅病通  
後日改き病歎食す不勝被立病也。  
一月もとあくえの風の病あく病あくとあくも最  
多病食勝年をもともじにありて後とある是も

免れ  
後稿

又免和歌  
アメイワガタ  
アメイワ歌トモウケニ吉田コムロ以下四  
ひよこすひわくとひよこす  
多へんうさうさうさうさうさうさうさう  
又赤かの初の夏をももあらはるに  
きもがれいづくとももあらはるに  
一風とまくひととおお

本以之為多之殊之也此亦  
今之之多不可不考之也

老の病氣は心と肺也。左之乾  
イマニキコトハ  
ノウチ  
ハシス  
一月の跡詞、二三月中一二か月の後、一而二不外也。  
難

之正身曰ふくこもそあらめを一そを難之

一糸カサナロトもく病アマシもわうえも難ハラシ之基後ハシタシすまうれの  
もとハセタヒトツとつとつと内ウチりといづ、滅アマガタが大歎アマガタ  
内ウチ太ヒコたれ、御ミツルもくとひくといひ、えあひのあくこつよ  
めう奉後ハシタシ難ハラシ之もんへ内ウチりるちや、

一糸カサナロトもくもくとあうともくろばくとくとくを代  
き候カクうの多タチれが降ハシタシ二句ヒツをもくらふよつて、

采エテ二句ヒツをもくらほ、米ヒヨウつよかうふよつて、

一糸カサナロト花ハナ詠ハナメ死アマリ絶アマリ零アマリ、海シマ底タマ、空スカイ和ハタハタ氣エア承シマ曆

和ハタハタ陽院ヨウイエンう合ハマツキよまく之シテはる不ハラシ、傳ハタハタ又アフタ之シテはる不ハラシ、

主シテ是シテ更アフタく北ヒタチ氣エア曆シマ、郁芳イフホウモニヤニの渡ハシタシ根ハタハタ合ハマツキも

ちふを辭ハサウ取ハサウ也ハタハタ、由ハタハタ天ヒタチ連ハタハタ御ハタハタ人ハタハタをも、

ももくヒツ小ヒツ死アマリを代ハタハタ、立ハタハタ、聲ハタハタ合ハマツキ、

時ハタハタ也ハタハタ理ハタハタも、まふからハタハタ、うきよハタハタ、もす、もわきハタハタ、み

やめハタハタ死アマリの、もくんハタハタ、うけハタハタ、内ウチも、いもハタハタ、もも勝ハタハタ、

ほきハタハタの部ハタハタも、死アマリ、すく地ヒタチ逃ハタハタ、

のう不ハラシ、殊ハタハタ、まく地ヒタチ逃ハタハタ、

一糸カサナロトよ詠ハナメ宋ソウ死アマリ、かが家ハタハタ、合ハマツキ、基後ハシタシねくもとの

ももくヒツ、音ハタハタ宋ソウ死アマリ、不ハラシ以ハタハタ延ハタハタ、根ハタハタ、柳ハタハタ山ヒタチ院

ももくヒツの縁ハタハタ、方ハタハタも、いもくハタハタそハタハタの、なうハタハタ人ハタハタ、

ゑもくヒツやくもくハタハタ、うんハタハタの、是ハタハタをねハタハタ、

一糸カサナロト云ハタハタ、未ハタハタ、の、或ハタハタ難ハラシ之シテ、陽院ヨウイエン、合ハマツキ、傳ハタハタ、

す、やまとく縦糸あ衣を机今難後高来、傍方合三二。

一、御走候不承宣もれよ御奉事を代多。

一、承志不考通対和非承事もよ御志と御見と地主致。

わ、ゆらよめよんの志、來よ

山を尋ねても地志心羈旅と魚旅人合意  
よもわらうあり

一、假條狀天座寛和已後多忙の体すまきと死を

乞、多忙の事と承りてあは假や

一、承諾お免事和合是の林染至古今地主承之

一、急不遇事公内事ハ急役亦不急也るれ當面意更テ

そ、是忙役也、但源氏相役自無アヌ付疏以合後

不急事を免テく

會、文小書、ちやかま

事合狀、鹿鳴事も同く

捕よ、去夢見北、お合がく跡、不咎絶と直作東

夢見北、絶え、夢忌、但其の為、性是や、すくよ

中よ失くある、お合、お合、於夢中、是乃かりめらむと

乃く浦川をすく、よび、夏すくらしとよみくら

新垣外、よし地名、や、假條狀日、浦川後御、うもおむ

部、夏政郭、もす、賤子、や、お、お、日、日、日、又、まつ、

浦川後中、又、死念、亮付事、うまよの、おとれよ、よも、宿

主失却、事今、た、多丸

五、下へ

因縁の旅食用湯圓のうどんを食えりかつらうどん  
とあるともううどんとおもひよへぬが不能は骨  
筋のうち立とくらわゆるみすみははうらゆるを  
わらひ歎歎也かう食承取ば御うきう代ハまの松  
山多くとくらわいそがのうやくことおゆふよ  
て食はすも入らぬひのりを極く直角や圓ひもし  
生もがれ未だりあり新納むまし又新納むま  
食く、うち先辈よみとてうどん

可接先生并祖

卷之三

卷之三

おまへはふいづんと生れそむきのくにすう  
あさのよし石を思や。もひ。もくわ

通鑑

卷之三

まちの様はあふとほくぢり、  
そく風るれの里  
まめの地 まめのえいよもと、  
まめのむらあり、 まめのま  
まくらえむ まくらがし、 まくらがふ  
まくらの國

卷之三

卷之三

神の心へ わくよ 月を祀るといふ事ありまんや  
えりきわや力せよ新吉とあまうら向  
えぬされど いふておのじひね まのむらりもま夢  
ひて夢ゆせ ねえ玉環タマコトさく  
ねえ玉環タマコトさく みせてもよ まめのいは

風流の  
まことや

シタモウカレ

○やひの海生れ。かまとひをわくとえりうる。  
○めのと。ゆきまつり細葉ねども。  
○よしとぬく。うちまくまく。むかうと。

○わらまくはひみわくと。

日本書高天原神

むかうと。

○は补さわめりあすい补のまうりわめ見  
ひあく後うみとくのやうのやうふも見  
されもの补さくのがくもあめりのとく

ヒタチ

ひめきのとくのばがらじ补み

らび补よれくまくあみまくわくも

うくさくさくとく人よくも

てかくとくとくとくとくとくとくとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとくとく

○時うあふ。今ものを

ヒタチ

あきとくとくとくとくとくとくとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとくとく

○ひあくは爐。○磨よのりる。

ヒタチ

わくとくとくとくとくとくとくとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとくとく

○いえのを。○みゆくとくとくとくとく

ヒタチ

とくとくとくとくとくとくとくとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとくとく

○せし。一月日をひき。○死みます。

ヒタチ

とくとくとくとくとくとくとくとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとくとく

○り玉座とあくよきとくとくとくとくとく

ヒタチ

とくとくとくとくとくとくとくとくとく

とくとくとくとくとくとくとくとくとく

ヒタチ  
聖母御誕生  
御誕生

ヒタチ  
御誕生

八  
風  
子  
一



續海十事抄

八葉抄

卷之十集十事

弘仲矣未修撰  
唐元年朝金華集

拾遺古今文集

芬名稿之序、  
水花微洞花集

銀洞花集古今之有常、是无常之乃勸撰二集以深眾流不至之。

拾遺古今文集

号今稿集

如山集不可勝計、以外擬名不復人古人不用或又

稿名古遠抄多以似通入通前事、

丘陵古今文集稿經家

策件稿稿古今卷不具、

丘陵古今文集尾稿稿之稿稿公稿

有兩序敦支作之

同答後三白江

鷺白眼

赤子

語

書

丘陵古今文集稿經家

同答後三白江

鷺白眼

赤子

語

書

△物物集

刀劍集

又名抄第之機之、

抄也

類聚集

山之機之平寶

懷

山之機之平寶

書

刀劍集

片卷抄、不妙機者

也

類聚集

山之機之平寶

懷

山之機之平寶

書

金匱集

一卷、不惟之機、

也

稿集

稿集

稿集

稿集

書

金匱集

成集、成集

也

稿集

稿集

稿集

鄂林百廿卷

唐蒲芳公批文、金三十卷、唐师

德高永教

撰之不妙、智足後序多之、

刻代而下、先惠、

如之物、乞逊不、勝斗、疏而多通、一用之、即知其  
鄂林抄一卷、雄鹿抄、尊易抄三卷、宋集私印  
万葉抄、山口紫苑抄、右後抄、句集十卷、集私印  
鶴也族物、大江廣經上、麻抄二卷、都梁右榮廿卷、  
敷院抄、近日又歛之未入之、

18ノ字目印文等、倍トアリ  
ナマリカ

△又家體體

新稿標式

秦公奉勅

古稿地式

秦公奉勅

不見文式

光安ア集

總序

新稿體體

子集

後稿書名抄

子集

真稿抄空卷

清補

緒固子枕

仲良

緒稿抄

仲良

じ方白女に傳、後源には以下承て、至る魚鳥等、蒙抄  
清補初學、一字後源、古風淳朴、在當時、無復也、  
又家參、西漢十部、引自馬九、亦抄物、不、勝斗也、

私集

物語

私集

物語

私集

物語

私集

物語

私集

物語

海外傳、復強氣要、

△難々

集

亦之集

亦之集自序 雜文

八雲抄

後半判

以前五方の抄を二年

白本半

一函六卷

内一卷

口文合

△私記

此中之證人証可也

塵沙抄九指

即夜集叢

捨生即夜集

集

亦之抄後惠

現存集已下二箇度會撮集不著而被書  
入之多以不載之也

更代集後感

井月集

附光孝充抄

後半之附之

披露之附之

廬

塔基注所

六指

附

多事之

附

後半子納之

復衣大將

中庭中綱之

亦之抄

海人之う

乳准御子

亦之

空派橋船

須者

亦之九指海表

後半充抄

清川院日記

後半

華吉日記

傳翁

川院日記

後半

劉氏六人基義

傳翁

六之機

荒原丸

邦元禮言

傳翁

波間抄集

長前司馬集

數名堂記

後半

今撲集

後半

續收

敷仲

亦之抄

後半

雅方撲

法多弘云

亦之抄集

通安

那子載

翁金  
表記方口分

小町集

惠光房擬  
已傳未死

三才集

照辰

有作集

翁國

荊谿春花集

芝嘉  
已傳未死

仁和集

云仙叟  
大和前田

宗林抄

翁國

西隱門

翁詮

百家抄

翁國  
大和前田

寶物集

康軒

世本十八家

美鑑  
太原集注

太原集注

翁國  
大和前田

眉齋集

翁國

獨喜集

翁國  
翁國

玉花集

翁國  
翁國

左近拾遺

翁國  
翁國

日本紀

翁國  
翁國

平遠抄

翁國  
翁國

鷺臛

翁國

鶴長抄

翁國  
翁國

鶴用

鶴長集

翁國

鶴長

翁國  
翁國

鶴長

翁國  
翁國

金雲抄卷第一終

阿波國文庫



110X  
151  
7